はじめに

永田和宏

二〇一〇年八月、河野裕子は六十四歳という短い生涯を閉じた。作歌を始めてからほぼ五十年のあいだに、河野の作った歌は、歌集に残っているものだけで六五八五首である。きわめて多作の作者であったから、実際には発表する歌の数倍の歌を作っていた。生涯に作った歌の数は、数万首になると思われるが、今回は、歌集収載歌のなかから一五六七首を択んだ。

河野が作歌を始めたのは中学校の時と言われているが、新聞や雑誌への投稿を始めたのは、京都女子高校に入学してからである。高校三年のとき、一年休学することになり、その間に「コスモス」短歌会に入会して、本格的に作歌を始めた。京都女子大学に入学してからは、文芸部にも所属したが、京都のいくつかの大学の学生たちが集まって興した同人誌「幻想派」に参加したことが、歌人河野裕子の実質的な出発になったと言ってもいいだろう。

一九六九年、二十二歳のとき、角川短歌賞を受賞することになった。戦後生まれの歌人として、初めての受賞であり、戦後世代が歌壇のなかで活躍してゆく最初の出来事ともなったが、以後、その生涯を閉じるまで、河野は戦後生まれの女性歌人のトップランナーとして走り続けたと言っても過言で

はないだろう。

初期の相聞歌

たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

から、中期の代表歌とも言われる

たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり

を経て、亡くなる前日、最後の歌となった

手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が

まで、河野裕子の歌は、自在にその形を変え、対象を変え、そして技法的にも変化をしてきた。

その変化の道筋は、ここに選ばれた歌を辿ることによってもおおよそは見ていただくことができるだろうと思っている。一途な思いのほとばしるような若い時期の歌から、後年の脱力感のある不思議な感覚の歌まで、その変化の跡は著しいが、それを辿りつつ、しかもなお、変わらぬ歌への思いも強く感じることができるのである。

月並みな言葉で言えば、それは歌への強い愛情ということにもなるのだろうが、歌へ賭ける思いは、いっぽうで歌を介して人へおのれの思いを伝えたいという強い意志に支えられていたのだと納得することができる。この歌集のタイトルを『あなた』としたのは、そのような河野が自らの思いを届けたい対象として「あなた」があったのではないかという思いからである。

この「あなた」は、連れ合いである私ともとれるし、母親や子を含めた家族と考えてもいい。さらにもう少し広く、河野の歌を読んでくれる読者へ、「あなた」と呼び掛けていると考えたいのである。河野の生涯の最後の一首となった歌ともそれは呼応しているだろう。

「あなた」と呼べる人々に自らの思いを届けたい、このやわらかい響きをもった歌集名を、いかにも河野裕子らしいと喜んでいるのである。

選歌には私と、息子の永田淳、娘の永田紅（こう）が当たった。淳が粗選をしたのをもとに、三人でほぼ三日間、缶詰状態で選歌を行った。一首一首読みながら、入れるか外すか意見をぶつける。夜中を越えて、夜が白みはじめる頃までその作業は続いた。選歌をしながら、ああ、こんなことが前にもあったと、かすかに心の動くものがあった。

河野は亡くなる前日まで歌を作っていたが、最後の二、三週間はペンを持つ力がなく、口述筆記であった。その前の時期には、歌が思い浮かぶと、薬袋やティッシュペーパーの箱など、身のまわりのものに手当たり次第にメモしていた。入院中の夜中に手帳に書きとめた歌まで、その死後に見つかった歌を、最終歌集『蟬声（せんせい）』に入れる作業を、三人で行ったことがあった。

『蟬声』の「あとがき」にも書いたことだが、このときも、淳があらかじめ打ち込んだ歌を、一首一首、三人で手帳やメモに当たっていった。暗闇で書いた歌や、鉛筆で書かれた筆圧の弱い歌など、判別は容易ではない。こう読むのか、この字はたぶんこういう漢字じゃないか、この上句はこのフレーズに続くのじゃないか、などなど、作業はやはり深夜に及んだ。

その時にも感じたことだが、今回も選歌をしながら、この作業こそ、河野が望んでいたことだったのではないかと思ったのである。もっとも近い三人が一つテーブルに集まって、河野の歌を読んでゆく。読めない字を読み解いたり、アンソロジーのために選歌をしたりしながら、時おり河野の時々の表情や仕草、エピソードに話が及んで、笑いあう。

彼女が自らの死後にもっとも望んでいたことが、こういう作業であったのかもしれない。家族をもっとも大切に思っていたのが河野であった。そして自らの家族を誇りに思っていたのも河野裕子であった。こういう機会に、河野が望んでいたような共同の作業を三人でできることを、河野のために喜ぶのである。

歌は、歌集単位で読んでいただきたいと、私は思うものである。一首の歌は、その前後にある歌によって、意味の深浅、ニュアンスの陰翳など大きく左右されるからである。このアンソロジーをお読みいただき、さらに河野裕子の歌集に手を伸ばしていただける方があれば、それをいっそうありがたいと思うのである。この一冊が多くの読者の手に渡ることを願っている。

あなた　河野裕子歌集　目次

はじめに　永田和宏

第一歌集　森のやうに獣のやうに……1
「桜花の記憶」の頃（永田和宏）

第二歌集　ひるがほ……21
生まれた時の記憶（永田淳）

第三歌集　桜森……43
どこかに猫はいないかな（永田紅）

第四歌集　はやりを……61
マスオさんの頃（永田和宏）
第五歌集　紅……79
アメリカの朝顔（永田紅）
第六歌集　歳月……107
歳月（永田淳）
第七歌集　体力……123
オオサンショウウオを捕ったこと（永田淳）
第八歌集　家……143
焚火（永田和宏）
第九歌集　歩く……163
タイムカプセルのような歌集（永田淳）

第十歌集　日付のある歌……187
三百六十六日間（永田紅）
第十一歌集　季の栞……217
ドクダミを干す（永田紅）
第十二歌集　庭……233
ロバと力車と（永田和宏）
第十三歌集　母系……251
唯一喜んでくれた装幀（永田淳）
第十四歌集　葦舟……269
石鹸の歌を思い出すように（永田紅）
第十五歌集　蟬声……291
自宅介護のころ（永田和宏）

解説——雨あがりの歌言葉　三枝昂之　315
河野裕子年譜　323

装幀・本文デザイン　濱崎実幸

第一歌集

森のやうに獣のやうに



第一歌集　森（もり）のやうに獣（けもの）のやうに

＊

一九七二（昭和四七）年五月一日　青磁社（第二次）刊
B５判変型カバー装　一三三頁
三一一首収録
解説＝高野公彦
一九八五（昭和六〇）年九月二日　沖積社から同装幀にて復刊

薔薇盗人

逆立ちしておまへがおれを眺めてた　たつた一度きりのあの夏のこと
落日に額髪あかく輝かせ童顔のさとこさんが歩み来るなり
振り向けば喪ひしものばかりなり　茜おもたく空みたしゆく
おのもおのも人間は小さき恥をもち赤き口あけ眠りてゐたり
ひとすぢの血のまじりたる鶏卵のみくだし貧しき今日の終りとせむか
吾が為に薔薇盗人せし君を少年のごとしと見上げてゐたり
ナザレ村に青年となりしイエスのこと様ざまに想ひてマタイ伝閉づ
出奔はつひに成らざり夕陽の中ぬくき線路を踏みて帰れり

つまらな気に石をけりつつ帰り来る受験期の妹よ小さき肩して

たれかれをなべてなつかしと数へつつつひには母と妹思ふ

十八歳

君の持つ得体の知れぬかなしきものパンを食ぶる時君は稚し

今頃はぼんやり鉛筆の芯などを見つめてゐむと病みて思へり

休学と決まりし午後にぽつつりとヨブ記を読めと主治医が言へり

癒えたならマルテの手記も読みたしと冷たきベッド撫でつつ思ふ

木犀のまるく散りしく径よぎり疲れし母が逢ひに来るなり

病室を裸足に脱け出し雨の中を駈けをり誰もだれも追ひ来るな

散薬の袋投げつけののしりて医師追ひだしぬ寂しき日々よ

ふつふつと湧くこの寂しさは何ならむ級友らみな卒へし教室に立つ時

耳たぶの小さきほくろの位置なども憶えし恋はかなしかりけり

青林檎

坂の上異様に赫く昏れゆきぬ坂の向かふに何かあるごとく

夕映えを常に明かるく受くるゆゑ登りつめたき坂道があり

少年のすがしさ未だ保ちゐて君にはGパンが一番似合ふ

青林檎与へしことを唯一の積極として別れ来にけり

火の如きわれにはつひにあらざりきひざ抱きて夜の湯に瞑りをり

陽にすかし葉脈くらきを見つめをり二人のひとを愛してしまへり

われよりも優しき少女に逢ひ給へと狂ほしく身を闇に折りたり

あふれつつ四国の海の鳴る夜を汝が追憶は断たねばならぬ

たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

君がもつ汗水のにほひ髪のにほひわがかぎわけて初夏に入りゆく

くすの木の皮はがしつつ君を待つこの羞(やさ)しさも過ぎて思はむ

炎ゆる髪なびかせ万緑に駈けゆきし青春まぎれなくま裸なりき

わが頬を打ちたるのちにわらわらと泣きたきごとき表情をせり

こみあげて思へば熱しかつてわが愛せしひとのせしごときしぐさ

君に似て少年めきしひとなりき見上げつつゐて告ぐべくもなし

土偶にも卑弥呼にも通ひだくだくとわれの日本の女の血めぐる

「ゆたゆたと血のあふれてる冥い海ね」くちづけのあと母胎のこと語れり

桜花の記憶

かへらざる憧れなれど夕映えてあかがねいろに坂はありたり

少女期終らむとしてうぶ毛濃き顔うちつけの西日にさらすかな

寝ぐせつきしあなたの髪を風が吹くいちめんにあかるい街をゆくとき

はえぎはのあたりに淡く陽がさして雲を見てゐる君二十二になりぬ

デボン紀の裸子植物のせしごとき浅き呼吸を恋ひつつ睡る

まがなしく坂は明かるく夕映えぬ金の輪まはして駈けて登らむか

すでにわれら一本の椎の木になりて冬木立吹き来る風に吹かれゐたりき

わが髪の付きしセーターにふさふさと身を包み街を歩きてをらむ

ももいろの封筒の角ちろちろと猫の舌ほどしめしてゐたり

ふるさとの本家の梁に一本の古き縄垂れ揺れをりしこと

夕闇の桜花の記憶と重なりてはじめて聴きし日の君が血のおと

色硝子すかしてみればまぼろしのぎんがぎんがまぶしい夜だ

夏帽子すこしななめにかぶりゐてうつ向くときに眉は長かり

くちづけを離せばすなはち聞こえ来ておちあひ川の夜の水音

われを呼ぶうら若きこゑよ喉ぼとけ桃の核ほどひかりてゐたる

さんらんと硝子戸砕く夕ひかりわれはつぶてのごとき恋を得し

火矢

あたたかく胸合はせつつわれら見き夕映え越えて帰る山鳩

にんげんの耳たぶのごとき形してむき身の貝が白くならべり

湯の中にうぶ毛のひかる四肢放ち母がわれを産みし年に近づく

石鹸の匂ひのごとき十代のある時期にして神経を病みにき

緑金の輝き

ゆふがほ

おほかたを病みて過せし十八のわれを植物くさいと言ひし友あり

息あらく寄り来しときの瞳(め)の中の火矢のごときを見てしまひたり

産み終へし母が内耳の奥ふかく鳴き澄みをりしひとつかなかな

いつまでも少年のやうな君のこと　樹液したたる夏木々熱し

バックルの双頭の鷲灼けゐしも君に打たれしも追憶の中

ブラウスの中まで明かるき初夏の日にけぶれるごときわが乳房あり

闇中に象(かたち)なきまま蹴り合ひゐし身かとせつなく抱き合ひたり

君をすこしわかりかけてくれば男と言ふものがだんだんわからなくなる